

愛の名のもとに

奨励	中川 好幸〔なかがわ・よしゆき〕
奨励者紹介	同志社小学校宗教科教諭 日本キリスト教団京都西田町教会牧師

たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持ていようとも、愛がなければ、無に等しい。全財産を貧しい人人のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

愛は決して減びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大きいなるものは、愛である。

（コリントの信徒への手紙一 13章1―13節）

心の原理主義

今、私には、二つの現場、小学校と教会という場が与えられています。よく「二つもおやりになって大変ですね」と言われるのですが、学校の方では「教会が忙しい」、教会の方では「学校が忙しい」と言いつつ（笑）、それぞれの場で理解と忍耐をしていただきながら、なんとかやっております。

さて、「愛」が春学期の共通のテーマになっています。そこで、今回選びました聖書箇所は、愛の章と呼ばれ、多くの結婚式で読まれる、コリントの信徒への手紙一13章です。この章の前の最後の部分に、「そこで、わたしはあなたがたに最高の道を教えます」とあるように、そして、最後の13節にも、最も大きいなるもの、信仰や希望よりも上にあるものとして「愛」は描かれています。この手紙から感じるのは、この手紙の作者はパウロという人物なのですが、あまりパウロらしくないということです。パウロなら、信仰というものを一番大事に思うのではないかと感じます。私たちは、自分たちの正しさのうえに相手を言い負かし、自分のやり方や考え方は合っていて、相手は間違っている、このように考えがちです。そのような考え方は原理主義と呼んで良いでしょう。宗教的によく使われる意味ではなく、誰にでもある「心の原理主義」と呼んでも良いと思います。そのような姿勢は、実は誰でも思い当たるところがあるのではないのでしょうか。ある映画を自分がとても好きで、それを話題にしたとしましょう。私はこれが好きだけれども、あなたはどうですか、と聞いたとき、その人がもちろん、その映画のことを好きだと言えば安心するでしょうし、会話が始まるでしょう。しかし、あんな映画は最低だねと言われたら、自分が気に入っているのに、あたかも自分の価値観を否定されたように思うでしょう。そして、自分の価値観を否定されたときには、自分の存在自体を否定されたように考えてしまいます。もちろん、本来は、そういうものであってはならないのだと思います。ある考え方や対象に対しては反対でも、その人を否定しているのではない。しかし、私たちがしばしば陥りがちなのが、誰が言っているかで、賛成や反対というものを考えてしまうことです。本来は、誰が言っているか、それに対する自分の姿勢はぶれるべきではないのですが、しばしばそうならないのです。同じことを言っているか、ある人が言っていたら賛成するが、違う人が言っていたら反対に考えてしまう。しかし、これは逆に言うところ、ある人が言っていることについてはどんなことでも賛成する、あるいは反対するといった、非常に視野の狭いことになってしまうのではないのでしょうか。それは、政治的な右翼・左翼といった問題、あるいは、宗教においてもそうでしょう。

もう一度話を戻しますと、自分は正しいと考えること、それ自体はおかしいことではないでしょう。自分はこれを正しいと思い、相手は違うことを正しいと思う。それでもなんとか共存していく、それならば問題がないのです。しかし、その自分の正しさを相手に押しつけ、相手は間違っている、と考えること、それがすべての原理主義の始まりではないでしょうか。

U2とメッセージ

皆さんのなかの多くの方が、U2というバンドのことをご存じでしょう。古い話になりますが、私が大学生の時代に、ちょうどこのU2というバンドがアイルランドからデビューしました。このバンドのボーカリストのBonoという人物もよくニュースに登場するので、ご存じの方もいらっしゃるでしょう。U2は音楽の世界では、グラミー賞の常連で、出すアルバムは必ずヒットし、また、高校生のときから全くメンバーチェンジをしない4人で30年ほどの音楽キャリアを続けています。そして、政治的な発言も積極的に行い、ブッシュ前大統領に直接自分の意見をぶつけ、前回の大統領選においては、オバマ大統領への支持を積極的に行っていました。南アフリカのツツ大主教などとも関係が深いですし、最近では、アウンサンスーチーさんの「できなかったノーベル賞のスピーチをする」というイベントで、自家用飛行機に彼女を乗せて行ったというようなことが話題となっていました。

ここで、私自身の個人的な信仰の歩みを申しますと、25歳の時にニューヨークの現地教会でキリスト教の洗礼を受けました。U2は、4人のメンバーのうちの3人がキリスト教徒なのですが、ちょうどそのころ、以前から聴いていた彼らの曲の意味などに関心をもち、彼らの信仰に基づくさまざまな曲を理解しようと努めました。そのなかに、今日ご紹介する「Pride」という曲があります。その曲には副題がついていて、「In the name of love」といいます。本日の説教題は、この「愛の名のもとに」から採りました。まずはお聴きください。

今日聴いていただいたヴァージョンは、スタジオ録音版ではなく、オバマ大統領がいよいよ大統領になるという2009年に行われた就任記念コンサートのライブからのものです。そして、このコンサートは、キング牧師が、それからさかのぼること46年前の1963年に、「I have a dream.」のスピーチを行ったのと同じ場所、リンカーン・メモリアルで行われたのです。通常、ライブでこの曲を歌うときには、「聖者キング牧師のために歌おう」「For Martin Luther King, Saint.」というMCが入るのですが、このライブでは、最後にな、「Not just American dream, also Irish dream, European dream, African dream, Israel dream, Palestine dream.」というように、キング牧師の言った夢は、「アメリカの夢だけではなく、アイルランドの夢（彼らの出身地のさまざまな紛争を指す）、ヨーロッパの夢、アフリカの夢、イスラエルの夢、パレスチナの夢でもある」と宣言しています。

ここで、この曲の歌詞について少し説明します。

Pride (In the name of Love) by U2 (奨励者記)

(前略)

One man caught on a barbed wire fence
One man he resists
One man washed on an empty beach
One man betrayed with a kiss

(中略)

Early morning, April 4
Shot rings out in the Memphis sky
Free at last, they took your life
They could not take your pride
In the name of love!
What more in the name of love?

有刺鉄線の柵につかまった一人の男

抵抗する男

寂れた岸辺に打ち上げられる男

キスで裏切られた一人の男

(中略)

4月4日の早朝

一発の銃声がメンフィスの空に響き渡った

ついに自由になった、あなたの命を奪ったのだ

でも、あなたの魂まで奪うことはできなかった

愛の名のもとに
愛の名のもとに、限りはあるのか

キスで裏切られたというのは、イエスのことを示します。イスカリオテのユダがイエスを裏切るとき、私が口づけをする人がイエスです、逮捕してください、という場面が元になっています。そして、4月4日というのは、キング牧師が暗殺された日です。ついに自由になった、“Free at last.”というのは、先ほどの“I have a dream.”の演説から取られている言葉です。ついに自由になった。ここでは、死を意味しています。キング牧師の命を彼らは奪った、しかし、その誇り（魂）は奪えなかった、ということです。

「愛の名のもとに」という以上に、私たちが動く行動原理はあるのだろうかと彼らは問いかけます。しかし、その愛の名のもとに戦ったイエスは、十字架につけられ、キング牧師は銃弾に倒れた、ということです。愛などを説く人物に対して、人びとは嘲笑したわけです。それみたことか、やはり、愛などというものには力はないぞ、と。

キング牧師

「汝の敵を愛せ」

キング牧師は、人種差別をなくしていくという公民権運動のなかで、インドの「ガンジー」の影響なども受け、非暴力主義を掲げました。しかし、その運動のなかで、敵対する勢力（それは、公民権運動自体に反対する人びと、そして、キング牧師のやり方がなまめると考える人びとも含まれているのですけれども）が、キング牧師に脅迫電話をかけ、牧師本人だけでなく妻や子どもたちの生命が脅かされる状況が生まれました。そのような場合、私たちの思いはどのようなものになるのでしょうか。相手を憎まざるを得ない思いになるのでしょうか。しかし、キング牧師はこのような状況にあっても、このころ行った説教のなかで、驚くべきことに「われわれは、人種差別を嫌悪しつつ、一方では人種差別主義者を愛すべきである」と述べているのです。

キング牧師は、「汝の敵を愛せ」という説教のなかで、実際にどのようにして、われわれが自分の敵を愛することができるのかということを、3点にわたって説明しています。一つめに、「われわれは許す能力を発展させ、養わなければならない」。許す力に欠けている者は、愛する力にも欠けている。そして、許しとは、なされた行為を無視することではなく、重い荷物を持ち上げること、負債を帳消しにすることで、新しい出発、新しい始まりに必要な雰囲気を作り出す触媒のようなものであると言っています。しかし、帳消しにすること、忘れること、これも私たちににとってはとても難しい行為です。自分がした悪い行為は忘れてしまうことはあっても、他人が私たちに行った小さな嫌な行為でさえ、なかなか忘れることはありません。むしろ、いつまでも覚えていて、機会があれば、あのときあなたはこう言った、こういうことを私にしたと言いたい気持ちをもっているのではないのでしょうか。

さて、二つめの考え方ですが、それは、「敵なる隣人の悪事、われわれに損害を与える事柄が、決してその人のすべてを完全に表わしているものではない。その人の全部が悪いわけではないということを認めることである」ということです。しかし、この点も私たちには受け入れることが難しいでしょう。少しでも悪い点を相手のなかに見つけると、それが膨れ上がるということがあるでしょうし、行われた一つの小さな悪をもって、ある人を断罪してしまうことがあるのではないのでしょうか。

そして、三つめに、「われわれはその敵を打ち負かそうとしたり、あるいは屈辱を与えようとしたりしないで、友情や理解を得るように努めねばならない」とあります。しかし、私たちは、これに対しても正反対の考え方をします。敵の行為に対して、言葉や行動という力でねじ伏せてしまおう、あるいは、屈辱的な気持ちを与えようと考えがちです。

キング牧師はまとめとして、「われわれが人びとを愛するのは、彼らが好きだからでも、また、彼らがある種の神々しい輝きをもっているからでもない。神がすべての人間を愛するから、われわれはその人びとを愛するのである」と述べています。キング牧師はさらに言っています。「イエスが敵を好きになれと言われなかったことは、本当に幸いなことであろう」。私たちに、どうしても好きにならない人はいるわけです。生理的にというか、声を聞くだけでも、気配を感じるだけでも嫌になるような。しかし、「悪人にも善人にも太陽は降り注ぐ」と聖書にあるように、目の前にいるのは、憎むべき敵のような存在であるかもしれないけれど、しかし、その人もまた神に愛されているということ、神の前では、自分も含めて、共に赦されなければならない存在である、ということなのです。

そして、その説教の次の展開部分では、「どのように敵を愛するのか」から、「なぜ、われわれは自分の敵を愛すべきなのか」ということが語られます。ここでも3点を挙げてそのことの説明がなされますが、第一の理由に、「憎しみに対して憎しみをもって報いることは、憎しみを増すだけであるからだ」とあります。憎しみは憎しみを増し、暴力は暴力を増していくのです。憎しみの連鎖、暴力の連鎖は簡単にできてしまうのです。それを断ち切るものとは何なのでしょう。

第二の理由として、「憎しみは、憎むその人にとっても実は有害なものであり、その人の人格を侵してしまうことになる」ということが挙げられています。憎しみにとりつかれた自分こそが、滅びの道を歩むことになる。そのことは冷静になれば気づくことなのでしょうが、自分のなかに憎しみが渦巻いている限り、憎しみの有害さに対しては目が閉ざされます。そして、憎しみがなんらかの形で報復されたとしても、私たちの心のなかに真の平安は訪れないだろうということは、私たちが予測できることであると思います。

さらに、第三の理由として、「愛は敵を友に変えることのできる唯一の力であるからである」と述べています。そして、その例としてリンカーン大統領のことを挙げています。具体的な物語は省略しますが、リンカーンが、スタントンというかつての政敵を重要なポジションに登用し、彼と生涯の友となったというエピソードを挙げています。（蓮見博昭訳『汝の敵を愛せよ』新教出版社 1965年 68〜75頁を参照）

「正しい」人

私たちには、常に、正しいか正しくないかという価値観や物差しがあります。そして私たちは、自分の正しさを主張します。テレビの討論番組でも、友人との会話でも、私たちは自分が肯定されたら、相手を打ち負かそうとします。正しい人は、（少なくとも）自分は正しいと思う人は、人に厳しい。そして、「正しい人」は、「正しくない人」を受け入れることが難しいのです。私たちにとって、他者を受け入れることは、相手もこちらを受け入れてやろうという姿勢があるならば、比較的できることではないのでしょうか。しかし、受け入れるという姿勢がない相手を受け入れることの難しさは、どれほどのものなのでしょうか。受け入れてもらえないと思うような相手を受け入れるということ。これが、私にとっても、最も大きな人生のテーマだと思っています。

愛の力

今日の聖書箇所で、パウロはそのヒントを述べていると思います。それは、信仰が第一のものではないということです。信仰とは、自分が正しいと信じることでしょう。しかしそれは、実際は、一番大事なものではない。キリスト教のように、信仰というものを基本に据えている宗教において、信仰が一番大事なのではないのだということの逆説といえますが、そのことの投げかけるものは大きいのです。「正しいということよりも愛することが優先される」。そのように言い換えても良いかもしれません。

イエスは、自分の命を奪う者を、十字架上で赦しました。キング牧師は、多くの脅迫を受けながらも、語ることをやめず、それでも愛を説き、銃弾に倒れました。この二つの死は、表面的には無敵死にのように見えます。やはり、相手を受け入れないものの前にあっては、愛さえも無力なのかと私たちに思わせるのです。しかしその姿が、この歴史の長い歩みにおいて、一体何人の人を立ち上げさせたでしょう。そして、その影響をどれだけの人に与えたのであろうかと改めて思われるのです。そして今、このようなイエスとキング牧師を結びつけるような歌が歌われています。いつの時代にも犠牲の大きさは計りきれないのですが、そこには私たちの理解を超えた意味があるのかもしれないということでしょう。先ほど紹介した“Pride”という曲には一つのエピソードがありまして、U2がアメリカツアーをするときに、この曲を演奏したらおまえたちを射殺する、という脅迫があったそうです。ロスアンジェルスが危ないだろうという警察の考え方で、実際、入場者から銃を没収したということもあったようです。当日のセットリスト（曲目）からこの曲を省くことを提案されたのですが、何があってもこの曲だけは歌うとBonoは言ったそうです。そして、この曲を歌っているとき、目を閉じながら覚悟したそうです。多くの観客のなかから狙われたらもう命はない、と思うながら目を開けると、ベースストのアダムが、自分の前に仁王立ちになって演奏していることに、気がついたそうです。この男の背中が大きかったと、後ほど振り返っていたそうです。

自分を受け入れない存在に対して、自分がどのように行動し考えていくのか。それが、私たち人類のもつ最も大きな課題だと言えるでしょう。周りが自分を受け入れてくれる人ばかりであれば、愛するということとはたやすいことなのかもしれません。しかし、愛とはそのような生やさしいものではないでしょう。「すべてを忍び、すべてに耐える」。到底、今の自分はそのような域に達することはできないのですが、そうできなければ、私たちの心のうちに平和がないということも、私たちはよく知っているのです。

愛の名のもとに

「愛の名のもとに」、それは、ともすれば、古くさいという時代遅れというか、甘いように思います。しかし、人を本当に動かすのは、特に他者を動かすのは、「愛」ではないでしょうか。“What more in the name of love?”「愛の名のもとに、ということ以上に何があるだろうか」とあるとおりです。私たちは力で人を動かすことはできるでしょう。しかしそれは、本当の意味では人を動かしたことはないのではないのでしょうか。心の中まで変えることはできないのです。本当に人に変わってほしいと思ったら、愛することではないでしょうか。しかし、そこには見返りを求めないということが付随します。相手が受け入れてくれることを望みながらも、根本的には全く期待してはならない。なぜなら、神の私たちへの愛が一方的に注がれるように、愛は本来一方的なものだからです。受け入れようとしたことは、実際は無駄に終わるかもしれない。しかし、蒔かれた種がいつか実を結ぶことがあるように、私たちがその実りをただただ、神に委ねることが大切なのだと思います。

「愛は、忍耐強い。自慢せず、高ぶらない。自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない」。自分は、自分だけは正しいと考えるという原理主義から、どれほど遠い考え方でしょうか。私たちは、自分の中にもある、あらゆる原理主義に否を唱えていきたいと思います。そして、「愛の名のもとに」歩むことを願いたいと思うものです。敵を愛することの困難さを常に思うものですが、自分が絶対に正しいと考えることが、私たちの本来の敵、すなわち自分の中にある倒すべき本当の敵なのかもしれません。